

7 寛政五年『花供養』

底本 白鹿

花供養

(表紙・題簽)

(表紙見返し)

枝をならさぬ御代の在がたさ、空

のけしきも心地よげなる春ごとに、此

道のしれものら、東山の芭蕉堂に

集りつゝ花の会して其くさ／＼を悉

像前によみあげ奉る。はた遠つ

国よりも捧し花いと若うおかしげなるも

老てさびたるもこれみな道の恩

を報るたぐひなりければ、ともにかい

あつめて、例のひとつ巻となし、長く

朽ざらんものとなしける。ことしは我此趣を

書べきにあたりけるまゝそれにしたがふ。

寛政五年春

四山亭幡水

所／＼に降花も供養の夕かな

蝶鳥帰る遠近の鐘

一座みな眠り上戸に春たけて

かし傘おほくおろし置也

流さじと船橋なかば切ひらき

たふさぎのみに軽き人々

雲はらふ風ことによき夏の月

銀燭ふかく御簾かゝげたり

たはれたる名や末摘の鼻赤き

幡水

闌更

車蓋

渭川

亀渕

百哺

斗流

芦涯

古律

豊後介の眉黒く見ゆ

良交

いかにせん道をさへぎる雪の竹

嵐月

汁の狸の友や啼らん

杜桂

門守りに寺の心はなかりけり

白黛

腹もたてずに女房出て行

魯長

いにしへのかたちばかりに鍋祭り

蛙方

しなぬ湖水の魚解きつゝ

一峰

名月にむかひ申せし玉の輿

百池

八束穂撰りて盆にのせ置

青阿

手拭に秋の色ある紅粉紋り

暮臘

鳥居の陰に恋の半面

古塘

さそふ水さそはぬ水も花の中

桃睡

蜂にもなれて蜜をとるとは

土卵

雨になを急がぬ春をとくとまり

柏由

跟の灸にすく／＼とたつ

俚尤

のさものを物にならずとさゝめきて

志諺

軍の留主に漏らぬ所なし

李明

守袋雪隠かくしの枝にかけ

月峰

此ころ産し子のはくを着ル

雲坡

貸してやる箱を開けば昔椀

鬼薊

報恩講の日にふたつ三つ

尺菊

月晴て雪丸流るゝ水の底

箕溪

貢ちかしとなげく鶴飼

蓮車

老の身に弁慶島はにげなくて

甫尺

地どりの宿の柱かたぶく

其成

右一順 下略

花の香のする夜尾上に簞かな

近江水口 屋州

草臥て嵐きく夜や花もどり

石部 良交

雨後の花ちるとて枝にすがりけり

、 亀渕

下枝は何になりしぞ山ざくら

水口 蓮車

志賀の花に東あふみの雉子の声

江西 瑳雀

ちる花の岩にへばりぬ雨の後

守山 李明

散花の中や仁王の紙つぶて

、 暮一

花手折人の跡追ふとちふ哉

大津 如龍

なつかしき桜がもとや暮の人

ほしか 桃仙

日は入ぬしばらく花のひがし山

堅田 未角

誰とはぬはつ花得たり垣の外

辻村女 りき

年ごとやかかはらぬ花に我が皺

水口 甚悦

下市や花に水汲む岸もなし

堅田 一之

斧の音しらぬ都のさくら哉

大津 井子

桜見や十日の雨もふらぬあひ

彦城 旭梟

います時これも咲たる桜かな

湖東 桃溪

かさなりし花のちりばや一重宛

、 民子

遅ざくら廿日の月におもしろき

、 柁寿

踏れけり桜がもとの墓

、

柰人

花の山一もとづゝのはやしかな

大塚

吾人

いにしへの桜を今にそなえけり

伴

幽川

花ざかり牛なめて行嵯峨野哉

麦牛

桜木や咲が中にもはなごゝろ

時中

物たらで一ツ茶碗や花の下

可斗

岩がねの花に酒宴や七むかし

草津七十翁

葵水

眼ざましや森の陰よりも初桜

、
僧

涼眉

きのふまで酒うる人も花見哉

、

許一

紙ちらす峰の嵐や花の本

、
可能

ちる花を化に餌はみし小魚かな

、
陶酎

覚束な鸚鵡返しも花の陰

長浜
此得

花白く石のはさまを流れけり

高宮
江山

夜ざくらや禁制札に魚の骨

守山
枝旭

夢の花さめて褥も花くさし

守山
周路

書を寄て花に耕谷の寺

江頭村
尾双

おくふかき花に一步の葉かな

駒井改
柏虫

かゝる日を人のまことや花供養

義仲寺
重厚

初花や人住山のうちくぼみ

加賀

松菊

いざやねん桜払ふに隙もなき

桜嶺

憐むや花に魚飛ぶ山根川

如蘭

柚の子やふりかたぎ来る花の枝

来々

辛崎もしづむや湖の花霞

眠和

花にうかれ羽をうつ蝶の行ゑ哉

舍涼

河舟やものゝ影そふゆふ桜

柳化

花ふかしかたぶく月のうつり哉

菱形

咲たつや桜の中の撞楼堂

綾窓

谷川の水汲上るさくらかな

文几

いたゞきへ行ば外山も桜かな

独子

有明に尋る浅黄ざくらかな

とみ

僧すむといふや桜の隣山

眉山

花色く月に見直すふもとかな

加賀 竹之坊

花の奥松間くのよし野山

本吉 亀選

咲日より花に来倦ぬ人もがな

才川 松華

よし野からふくかあらしの花霞

本吉

つよ

朧気のぬけたる月や遅ざくら

宮腰

雅石

手折つゝ花を手向ん道すがら

小立野

湖南

桜見や都のうちはよの世界

麦風

反古買う人にや花のはつ便

魯文

鞍つぼに花の散こむ夕かな

一川

鳥の来てもつれもやらず糸桜

其子

かげ高き恵や花の雨雫

金沢

楚流

破垣の柱となりし桜かな

才川

丸交

潜り入くゞり浮花やよし野川

、
江花

目にたつや花の中なる柿頭巾

雪馬

一本の桜おしみて小みち哉

対山

野路の花犬さへほえぬ月夜哉

阿青

散花や長き門田の土蔵どめ

金城
更々

花に出ぬ日の珍ら敷くひと日哉

小松
龜上

はつ桜下戸も上戸もなかりけり

故園

温泉へうつる花に春ひゞき哉

朶山

吹まはす桜の中のさくらかな

金沢
兔文

とし／＼の雪に老てや山ざくら

一杪

ちる花の浪間にうかぶ人魚哉

能登黒島

珠卜

大磯や花に船漕ぐ釣翁

玻井

曙の花に飯食ふ舟路哉

文朝

鷺の子のねぐらを迷ふ桜哉

岐草

花をめづる罪は弥勒もゆるしけり

似休

賓客も琵琶かきあはす花の下

布遊

雨の夜や花盗人の隣から

埜東

朝日さす額に花の雫かな

馬涼

炭竈の崩れ踏けり山ざくら

柳汀

山伏のひとり花見る深山かな

犁邑

鳥さしの罪をくゆるや花の中

都山

かち星や花静なる山かづら

素玉

風絶てたゞよふ水のさくら哉

彦秀

人(調)だちや初桜より遅ざくら

、七尾 暮臘

一本の桜に霞むはたけかな

新之口 其之

松桜塔にのぼりて花の雲

三臂

李青

見かけ行花のよし野々入さ哉

吳曉

雨のはな漸まどろみぬふところ子

田鶴浜

李溪

してかけて弓はる庭の桜かな

、川田

佳超

人去て静まる花のにほひ哉

田鶴浜

帰朝

土鍋にもめしたく家や山ざくら

、

蒼枝

ふり袖に夜の桜のほこり哉

、

卜尔

花の陰に魚のかたまる小川かな

、

几嘯

ちはやぶる社に高きさくら哉

、
文詠

曙やつり船つゞく島の花

、
雨卜

眉かきに召るゝ花の台かな

、
虫之

雲はしる中にさくらのうねり哉

、
剥笑

色／＼のさくら植けり祢宜の場

女
むゐ

ほそめたる戸口に匂へ夜の花

、
みわ

ゆふばへや渦まく水に花の塵

大牙

見尽や花のゆふべを花の旅

高田
寛風

はつ花や蛛の巢払ふ地藏堂

、
暁泉

ねたましや花を踏行磯の砂

吉田

旭山

猪牙漕てしがらむ花のながれけり

赤倉

可成

神の花火とぼす夕人多し

高岡

楚吟

八重山のにほひゆかしき桜かな

登都

花の雲ながれて松の曇り哉

川田

乃至

漕出て舟路の遠きさくらかな

タケベ

好古

杣が家の桜は雨の半かな

、

五雲

御車のあととはづかしな花の本

東馬場

雨柳

あけぼのや雲をわかるゝ花の色

、

知一

夜の花に音なき雨のしらみけり

錦川

玉史

ちる花のついてきにけり洗ひ髪

所之口

李月

人ありて夜は火もやす桜かな

ノトベ

麦杜

粟津野や夜雨桜に日も寒し

越中戸出

蚕臥

八重花の七重がさねに根山哉

或静

掃よせて世はかり枕ちり桜

玉可

居過して我を恨みんちり桜

牛石

帯解けばばらつく雨の桜哉

幾秋

花のあらし背負て坂の夕哉

松汀

よきほどに顔香らせよ花の雨

桃井

寒き日もぬくき日もがな花ざかり

、泊

還量

すれあふて花に寝てみん東山

士沈

木像も此比花のほひかな

公眉

頭陀の身も桜に残る心哉

右明

時しらぬふもとは花の夜明かな

止口

花ざかり人はむかしにかわれ共

梅夫

暮おしむ花や朧の山かづら

、支

山ざくら咲埋たるふもとかな

百爾

ちる花は散ても／＼さかり哉

止定

富士の雪雲に隠れて桜かな

奴原

月白く花猶白きゆふべ哉

其闌

水遠し酒猶遠し山ざくら

市隱

暮やすく覺て花のたどりかな

井波

牛雅

濁江や岸の桜になよし飛

、放生津

二翼

山ざくらもどりは流れづたひかな

魚龍

米くはぬ僧都住けり花のおく

白老

静さや花のゆふべの僧一人

麦秀

むかししのぶ花の主のみさほ哉

明神浦

磯仙

桜また花裏がちに見ゆるかな

越後高田

竹茂

煤けたる扇をさして花見哉

十日町

桃路

燭さして見れば花ちる晦日哉

上野高崎

朔宇

二日見し山鳥にちるさくらかな

、
富春

鹿の背に桜を見たり朝朗

、

玉支

折すさむ鞆鼓の撥にちる桜

、

許一

花に暮て又去りがたき月夜哉

、

凡二

山里や下りて我家も花のおく

、

以貫

山寺や膾の中のさくらばな

、

紀一

晚鐘や明日ゆく花のみ寺より

一宮

羽黄

月落て星の光にさくら哉

、

尺龍

朝霞さくらとなるや向ふ島

松井田

松和

夕栄や少し風有て花の散

下仁田

暁鳥

名残ある花を斜に裏日さす

田島

南浦

あみはしを渡て花の通路哉

、草津温泉

鷺白

しなてるや片岡の花昨日より

、

柳水

かた枝に霞かゝれり明の花

、

魚柵

暮るをもしらず顔なる花見哉

、

夜雪

さそはんとせし人にあふ花み哉

、

菅菰

酒汲んで夜に足す人や桜狩

白質

白ざれし桜の山に雪の降

語山

刀さす美人や花の日暮まへ

龍山

曙の花見るに燈さす筈かな

助戸

一贅

莖織る花のおくなる天の川

柴駅

南桜

しら雲のかゝり所や山ざくら

韃負阿堂

雨夕

山ざくら一えだづゝの雲の間

柴駅

湖嵐

野桜や青草まばら踏しあと

藁町

秀和

遠方の山白く見ゆ花ざかり

新河岸

鶏秀

花に寝てすでに山居の心地せり

境町

専車

おもひ入山もさくらにさくら人

坂本

三千国

牛に乗に花の中行日より哉

笑魚

夜ざくらや朧ことなる明の月

粉川

民化

花さくやしるし曲の夜の門

、

白選

蝶／＼も人もしたふて花供養

上毛厩橋連室沢

兔了

うき事も忘るゝ花の旅路哉

沼田亥屋

素喝

同じ世にあらば都ぞ花の山

、平出

柳歌

咲につけ散につけ花の面白し

相生町

素陰

建つくや花の山路のかし座敷

、

菊夢

ながめやる顔へひらりと花散ぬ

まやはし町

退輪

磯山や花咲中のしほ曇り

、

素太

雲岫をはなれて花に極りぬ

、

素舟

揃ふたる顔美しやさくら花

、

径処

さく花に風つゝがなく吹にけり

、

素同

けふはまだ延て置れぬ桜かな

、

四祖

山寺や桜につゞく鐘の声

、

輪賀

咲ごとになれて老木の桜哉

、

李雪

ひれふるや花散籠の鯛ひらめ

、

土卵

人びとにえゝり都の花盛

、

米砂

散かゝるさくらが本のまだら牛

下毛助戸

嗽石

生ぐさき風の香きえて磯の花

、足利

利井

いとざくら散ては又一ざかり

奥州ツガル

呉江

踏かねて立休らひぬ花の道

、

燕児

人里は暮ても花に鳥の声

、

金桃

月落て桜が本のうすあかり

、弘前

春潮

咲みつる下に二朶の桜かな

、

勢久

夜ざくらや霞ほのめく月の色

、

桃仙

十分のさくらに風のふく日哉

、

草夫

朝ざくら神馬の瘦のものさびし

、黒石

子尚

散る花やつるべにある雨の跡(ママ)

、

亀文

帰る時になつて桜の山ふかし

、

富之

探りてもまがはぬ色のさくら哉

、盲人

乙外

世わたりの仏織なり花の陰

、

梅中

花守の花を見てゐる月夜哉

、

梅成

散花や鱒や筏やよしの川

、合浦

官応

世にうとき心を花に定けり

南部花卷

鶏路

此心夢にや入らん山ざくら

、

守中

見知たる顔して立てり花の門

、

吏山

花見んと人なき門をたゞきけり

、

浣素

花の雲こゝろ競はす水の末

出羽古沢

露橘

花の道や役の行者も出来心

、

至徳庵

宮守と豆腐食けり雨の花

古沢

素風

花咲て千里が浦もさかりかな

、秋田六郷

洞々

出嫌らひの人に逢けり遅桜

、

支由

雲となり雨とはならぬ桜かな

、

美長

此心常に持たき花見哉

佳笑

宴果て花もおぼろや長局

朶々房

未ラ川も花の流を汲にけり

秋田仙北角間川

杵云

散花やほろ／＼雨の暮て行

馬六

昔鬼住にし所も花ざかり

時習

夜桜に鐘撞坊が嚏かな

武州江戸

菊明

朧に月の石ばしる水

瓜坊

書を右に琴を左に春暮て

眉止

きのふもけふも飯蛸を噛

百柿

煤を巢に軒の雀や馴ぬらん

百静

輪をなす煙雲となる迄

左鶴

ウ

直宿する身はつれ／＼を中宿り

青奴

牛捨に行て卯の花の暮

止蓮

岡の辺の道も当摩の練供養

坊

いかにや遅き辻占の君

明

嵐して憎き心のみだれ糸

(濁)

栖霞

柜の穂さはる窓の暁

千崖

月の弓さす手引手のたび枕

秀川

鳩ふく人に三日物いふ

秀孝

母連て音無山の隠れ住

坊

潮のめたるゝ小貝一籠

明

花の浪陽炎車すゝむらむ

柿

袖ひるがへす東風の狩衣

静

子に迷ふ猿の遁吼うつゝなき

左

筏繫てあがる雪空

奴

此あたり酒は富士見の名にも似ず

蓮

隣座敷は公事の相談

観寿

兄弟の信トを恋の丸びたい

荷菊

心のやわら書延る文

花弟

福原の松一しきり落葉して

明

しら雨そゞぐ塵の瑞籬

坊

藁一手とり来て馬にはませけり

寿

何に替るぞ真柴椎柴

礎

月に茶に身を墨染の板庇

静

甘干あまた置初る霜

川

ウ

米絶て車休る水の筋

孝

乞食やさしく梳する

柿

それ／＼に浮世のかざりはかなくて

奴

霞にへだつ(濁ママ)九重の宮

蓮

花の客いつ迄草の起臥に

笠蘭

麦に鶉の面白き比

筆

桜咲てわた入重くなりにつけり

江戸

瓜坊

たはむるゝ鳥や散花ふくみあふ

本庄

釣牛

紐解し花に障りそ嵐山

青梅

涼宇

谷川や花のためなる橋普請

勅使河原

快馬

影あふげ暗も明るき山ざくら

江戸

濟川

散中にちらぬ桜のあはれ也

、

尋古

花のさかりなき人の今有ならば

、

匪石

花うれし人に慈悲せし寢覚より

、

三彦

さればこそこゝらにも住め山桜

、

貞松

谷深し花より上を風わたる

、本庄

双鳥

鯛洗ふ門外の寺や花盛

、

素溪

見しあとや花のあたりの捨提

、

鶴中

雨はれや花に行とて物忘れ

、

みつ女

けふは花にとりわけ多し屋敷衆

、

喜代女

花もどり礼崩れたる女子連

、

李明

かけはしや廻れば花に日のたける

、

一馬

影しばし花に事足る潦

、小川

為梁

すこしくはまがれるもよし花の道

、本庄

万井

ちる花を今朝は茶に汲筧哉

、

冬抄

花の下枝聖かゞんで潜りけり

木がくれに谷の手がらや遅桜

散花は隴鳥のねぐらかな

花びらにそだつ様あり初桜

笙の声に桜しらせし深山哉

雨雲はのびて桜の曇かな

花咲て酒水くさきふもと哉

酔ざめや我のみ月の桜人

、 雪更

、女 文絹

江戸 鳥翠

深谷 羅門

、 素山

上総長者町 汀鳧

、 正翠

郡田村 魚水

花ねたむ女車の出立かな

押日村 山水

青空にすかせば浅黄桜哉

、 樂中

下臥や花の外には月も見ず

甲斐 可都里

短歌二首

春の夜や桜夢見て戸に迷ふ
といへる発句によせて

身の上に春の桜や咲ぬらむ

ひと夜もおちはず夢にし見ゆる

休らひやさくらを過て茅花

ぬくといへる句に

山ざくらおぼつかなくにとめくれば

野辺のつばなに夕日さす見ゆ

さくら咲や馬上に霞む人の顔

散がてや月も三日の夕ざくら

桜咲ていとも行かふよるの宮

ちり雲や桜にかゝる朝ぼらけ

折さじと火のとぼれけり夜の花

山ざくら雲井にとゞくさかり哉

山ざくらことしものぼる命哉

、

漢甫

作良

蘆舩

美敬

古市場

□原

台眠

市川

召洲

、

唐笑

桜咲て寝るさへ惜しき日数哉

夕ざくらおくるゝ人を散分る

酔さます薬にもなれ朝ざくら

山本や人声ゆかし夜の花

花の嵐江に移り行けしき哉

いと桜花十分の月夜かな

木枕に寝覚おかしく宿の花

朝酒になるとも花の奢かな

猿をかせたぐりて折や山桜

、
岷山

浅原
真洞

小笠原
右書

、
春路

、
翡来

、
柳橋

、
箕風

、
静管

平岡
如雪

寺の門花の夜半にも叩きけり

河内破岐井

川里

ひたすらにうかるゝ江戸の花見哉

飯野

静良

六ツ指はきれとや盗む花一枝

孤山

夜ざくらにとぼし火持ぬ丈夫哉

黒沢坊

幕ごしにいびき長閑し花の昼

信濃飯田僧

忍阿

山伏の家ふりにたり花ざくら

、

きく丸

磯山やたゞ二三本さくら花

、

*
■水

辻堂や市女は花をつかみざし

、

羽静

*「人」扁「己十」旁

谷間や風のくまどる花の雲

、

知足

峰の雲ながれて晴る遅桜

、

里三

旅法師花に物おもふ風情哉

、

花彳

夢ならじ桜さく夜の花風

蘭二

山ざとや三度のめしも花の中

、 塩名田

柯則

誰が庵ぞさくらが本の小柴垣

、

文涛

弓取の忠義にもよるさくら哉

、

文耕

初花の世をむつまじの隣かな

塚原

宗剂

衣手は酒にぬれけり花の山

片倉

崎給

薪ほど花折もどる童かな

今岡

胡園

夜ざくらや更て入さの月薄き

下縣

涼山

廻りきて四方に花の香かな

飯田

壺伯

町並に桜咲けり社務が門

諏訪

自徳

はしり帆やいづれの花の山風

遠江浜松

約我

庵建てみれば不自由ぞ花の山

、

白輅

花咲てよききぬきたり蘭書読

伊勢御園

四山

分入れば花なきおくの庵哉

南紀

綸車

花ざかり老の世の垢おしみけり

加龍

さゞ浪やはま松こゆる志賀の花

后車

薬うり虎うごかすな花の本

御園

轄其

いとざくら鳥の背をうつ嵐かな

秋屋

諸鳥の解し色音や朝ざくら

御園

栗花

花の山雲と見し夜は明にけり

山田

晴山

影ひろき日のうつり香や朝の花

、石薬師

甘谷

彼岸桜／＼や幾千代も

、

露友

枝折戸のしぶ茶も薫る桜哉

、

既白

香に咽てさくら抱けり夜の山

上田

珉山

花の瀧ながれに頭陀を枕かな

神戸

春村

花にふけてふとしらむかと思けり

亀山

鳳里

手にあまる女がよくやさくら狩

、

其隼

春みちて松の木の間も桜かな

、

思秋

花ちるやおもへば春も化となり

白子

宇兆

しら波に花ふりかゝる岬かな

寺家

帯川

ひる過や茶色きつれし花戻り

、

無曲

花折ば連歌しかけん衣かづき

、白子麟々社中

獲車

霞にえふて狂ふ猿丸

、
麴車

春の日を舟漕くらす湊江に

、

花の山はなれて星の薄光り

、

草のもちゐの価とふ暮

獲車

戦に酉の唐丸勝ぬらむ

、

仰山や花さく前の造り道

志摩鳥羽

蒼梧

おろかさは桜ちる日も花ごゝろ

大和宇陀

蘆雪

遠のりに得たりかしこし初桜

、

三巴

栞なき道たどくし山ざくら

郡山

麦丈

春秋に見し顔多し花の山

河内長尾 路平

草つんだ手(濁ママ)の恥かしやいと桜

藤坂 加友

真直に行れぬ道のさくらかな

招提 茶丸

世やむかしうち守りつゝ花一重

撰津浪花 尺艾

久かたや日の光より花のちる

、 不休

夕暮や人になだ(イイ調)れて散桜

、 春芽

人も見ぬ片山桜風そよぐ

、 文屑

浪の音近うなる迄山ざくら

、 蒼水

咲にけり散けり花のあらし山

ちる花の台にゆるむ嵐かな

夕あらし花守こぶし握りけり

、
盛雅

、
秀里

、
江涯

遠島や船より上を花のなみ

淡路
黛朶

左遷の歌もやあらん島の花

東槩

山人の袷をかけしきくらかな

讚岐笠井
芝峰

西行を夢にまつ山花ざかり

大野
三千雄

宿とりて朝な夕なの花見哉

播州鹿古 玉屑

炭竈といふもの見たり桜狩

小野 君中

迷ひ子の行ゑや岨に山ざくら

、 沾良

狂へく／＼狂女もひとり花の陰

、 田履

眠さめて迷はぬ桜散日哉

備中倉敷 玉井

咲崩れ花散や我跌座の上

、 芥舟

窓にまだあけぬ夜あかし花の色
(濁ママ)

笠岡 春千

待人やまたぬ心の山ざくら

女 瀧

来る春の詠にのこせ花の枝

吉岡

象文

我も花になく鶯の仲間かな

、

蓼雄

花ひとつ乗出けりはるの山

、

箏牙

たらちねの笑顔を常の花見哉

女

さな

鳥飛んであとにぎはしき花の山

吉備

文谷

桜咲て薄紅みや水のおも

、

守里

花のあした心にかゝる雲もなし

倉敷

無涯

手向ばや山は其まゝ花供養

、

巴凌

梅のうた花に吟る童かな

、玉島

桃佐

しづまりて闇の朧や軒の花

、

桃牛

雪の気もさらで北山ざくら哉

、

桃枝

虻蜂の声あるばかり山ざくら

、

桃丸

峰をこす雲に桜のかぎりかな

、

桃之

鍬ついて花見の人を花見哉

八重村

文重

其薫りゆかしき花の朽木哉

笠岡

知風

色も香も空に満とや花曇

如水

世／＼になを茂れる花の手向哉

斗外

月と花の中にあかるきけしき哉

文里

ひこばへの花に本木の雫哉

備後三原 梨陰

妻木櫛はこぶ女や花のおく

、 五沖

夕ざくら夜をも思ひは捨ね共

、 士芝

ちる花を岩にかぶせて水ぞ行

、 何笠

静さや浅黄桜の朝ぼらけ

、 府中 可卜

ちりがての花こそ花の夕べかな

、 明々

花にねる鳥を羨む夕かな

福山

一声

花咲て名をなのらする山家哉

、

酔楓

おしめども散ありてこそ桜花

、

鷺汀

百度も手向て見たしさくら花

、女

花夕

それ／＼の花に煙のたつ日かな

、

南竹

夕和や花のかぐみの水しづか

、

仙魚

花の山もどりは月のしろき哉

、

柳里

初花や山間／＼のぬかり道

福山連

阿翠

花の雲行わたりけり暮の鐘

、

南岳

散かゝる花のにほひや芝むしろ

、

寛志

さく花やもとは一木の恵みより

、

指月

ちる花やわづかな雨も恨なる

、

右汐

草臥て児は寝にけり山ざくら

、

李朔

何某のあとゝ見えけり八重ざくら

安芸川尻

金竟

宵闇やいざぬれてみん花の雨

、

芳壺

道乾く日和となりてはつ桜

、

東升

律院や花に夕べのかしぎ水

御手洗

蘆舟

かた道はから樽さげて花見かな

、

千里

はつ花や去年のまゝ成捨竈

、

柴花

かけ橋は草の古柴やはつ桜

、

萩露

公達の脚ふみ出しぬ山ざくら

、

鳳洲

順礼の指さす軒のさくらかな

広島

中

さく花の実を結ぶ間の旅路哉

竹原

竹両

ゆく花に畳も出来つおくの坊

御手洗井

五柳

しんく／＼と照日や花に眠気さす

小カタ

可友

二三本杉の古木や花の山

周防岐波

羽仙

誰人ぞさくらが軒の雨やどり

、

春郷

ちる花に小鳥いざよふ山辺哉

下津令

明羅

宿かりて我もさくらの主かな

、

安甫

ちる花の本に白髪の眠りけり

山口

蘭台

明日といふ世はなかりけり花の山

、

波光

見てもまた又見てもまた桜かな

、

李蹊

掃目にちり込花の積りけり

、

孤峰

桜よりくだる流の薫り哉

、
孤月

高野山女のしらぬさくらかな

、
鴉跡

ふみまよふはては桜となりにけり

、
雨竹

秋津洲に其香伝へて花供養

、
天民

道の恩しるや花にも臍にも

、三尾

宇宙

花曇り夜は隈なきけしき哉

上関

荷涼

花ざかり柚が住居の捨がたき

、

変白

鍬のえに鳥遊ばせて花見哉

、

桜二

花守に精進日あるぞあはれなる

大洲

羽琴

散花やまだ(満ママ)四五日の春寒き

、

琴那

世の中のしる人これや山ざくら

室津

鯨牙

峰も尾も時を得る日や花供養

長州舟木

蝶巴

世を捨てさくらにおしき命かな

、

波月

遠山や雲の上ちるさくらばな

長田僧

孤甫

花曇り鷺は何地へ寝に行ぞ

赤間関

羅風

植し花経り行我を思ふ哉

、

里山

酔伏てあしたの桜ながめけり

、
南江

松原に下りて寒き花見かな

、
阿声

初花やふとおもひ出す一むかし

、
文賈

山ざとやかはらぬ花に人ひさし

、
僧

枕石

しばらくは山をかたどる桜かな

、
松雨

夕暮の風や花見のうしろふく

、
魚能

蛸の子等骸乾かすや花の陰

、
里江

奥深く分入るさとや花白し

、
錦翠

雨晴の名残にあまる桜かな

、
花来

都近き花ははやくも敷れけり

、

比雪

散る花の陰や立て見居て思ひ

、

楚柳

ゑのころのたはれ合けり花の本

、

文川

花守となりて世わたる男かな

、

花暁

人まれに山ふところのさくら哉

、

南巢

花やさくらしらぬたつ木の雲の中

、

薰里

我事におもふ桜のあらし哉

豊前小倉

南明

ちる花にことたるさかの月夜哉

、

南珠

桜ちるころやましらの人に啼

、

夏夕

啄木鳥の音おそろしや花の山

豊後鶴崎

掬泉

流れくふもとは花のさかりかな

筑前飯塚

竹両

山ざくら酢莖うる家も出来にけり

、

舎丁

紙すきのちらば漉こめ山ざくら

(444調)

、

奇峰

米つきも羽織きて出る花見哉

、

莞而

散ばこそ花幾里のながれ哉

、

士沢

山ばなやすそに水ある花の雲

君花

人絶て散かさくらのゆふ月夜

黒崎

其柳

鑪鞴あとに緋桜貝や岡の花

茶郷原

岡寿

火とぼしの宮司疎し夕ざくら

若宮

石睡

岨かげや散静まつてゆふ桜

若宮

、

武者一騎花に睡る山辺かな

、

花候

風軽し花にこぞるも樽ひとつ

甘木

闌雨

思ひ出は花のあたりの丸寝哉

、

梅廬

守人はおろかにも花にかしこまる

、

帰来

駕舁のうづくまる花の莛かな

若宮

素釣

境界を花にうらやむ夕かな

蘭溪

鶏なかぬ関しまりなや花ざかり

直方

可角

咲初てすぐに桜のゆふべかな

、植木

此原

空に月花散山のあはれなる

、

雨菽

ひや／＼と釣鐘にちる桜かな

、

寄来

うかれ気や今日降雨に花の夢

、

涼眉

花の本翁に舞をすゝめけり

、

白移

桜がり心に水の音遠し

曙川

花にそふ此かたはらの住家哉

人にうときながれ伝ふて花得たり

山中やまがへる道も花の中

片里や花のみ我をそゝなかす

待花に朝夕人の侘るかな

花散や天津乙女のきぬの色

花咲て雨ぎる空をいとひけり

、

遠子

、

何来

女

たき

秋月僧

芝風

、木や瀬

木耳

、

花情

笹田

流志

花の真色見よとて月の曇哉

肥前諫早

白鷺

立寄てふらるゝもよし花の雪

、

孤石

只ならぬ庵に来たり山ざくら

、

亀水

暁の風しらみて飛や山ざくら

、

玉孚

夕暮やあやなす花に池曇

、

左東

花咲てくもらぬ人の心かな

、

雨夕

部足りや月の前なる明の花

、

春扨

笠脱て吹るゝ花のあらし哉

、

芳笠

うち霞み／＼花の高根かな

、

若柳

こゝろよく濡るゝ山路や花の雨

、

霞船

花活てあそぶも花の供養哉

、

蘆月

出るにも入るにもうれし花の宿

、

梅路

ちれやちれ散かゝる花の名残には

、

停華

見かへるや桜を惜み日をおしみ

、

梅枝

うつとりと見とるゝ花の盛哉

、

悦女

四辻にさくらを分る□嘯哉

、

春蘆

花のえだ思はず折て思ひけり

小路から軽ひ花見の出立かな

はなの山主たづぬる日暮哉

雲つゞきならぶさくらの一重哉

夕空や神のさくらの雪と降

百とせの花を替らぬ眺かな

日比憎む風も猶さら散桜

初花のたづきとなりぬ洞の人

、

一奥

、

聖兄

、

桃局

、

霞紅

、

青呂

、

東律

、

起雪

、

輝白

曙やはなの上行むら鴉

、

梅江

我庵やどちら向ても山桜

、

澧波

明行や松のひまより山ざくら

、

文塘

高き屋の御製を題す

煙たつかまどは桜咲にけり

、

紅良

桜戸やほそ／＼そよぐ夕あらし

、島原

琪月

笠のひも花に解する山路哉

文智

三ツの外たれる物あり花の庵

ちるまどもやさしき花の梢哉

花の日やあくがるゝ我に暮かゝる

みよし野や護摩の煙に桜散

晴てから桜に雨のひかるかな

分入ておくも迷はじ遅ざくら

筆持て何おもふ人ぞ花の中

けふも花のもどりは人に後れたり

、
一壺

、
竹梁

神代
春喬

、
呂柏

、
利帆

、
画鮮

島原
陀雲

、
湖竹

ちる花は酒のさめ行心かな

、

文士

何ざくら斯さくら終に夕嵐

肥後八代

文暁

魚は水つばくらは花の日和哉

、

遊虎

雨風にすこしはのこる山ざくら

、

蘆石

谷はらや桜にかゝる橋一ツ

、

野梅

散るまでと花にかぎるや借座敷

、

不白

島山やさびし桜のあだ曇り(薄ママ)

、

柿青

仰向けて笠に受ばや花の雪

野間新地

竹壺

花に寝てさむるはおしゝ夢心

蘆北

蔦路

植たてゝ花にとみたる小家哉

求麻

石羊

山陰や水もさくらの色に行

半橋

桧笠ぬぐや老木のさくら陰

禹巧

花ざかりまゝならぬ身は家に泣

李程

雨ならで柳に見越す桜かな

有之

死さうな人ひとりなき花見哉

、

綺石

諫ればまた花折りぬねぢけ人

、

異治

花で候桜で候の身はづかし

長峰

連山

其数にぬれて嬉しや花の露

、

芳山

名をのせて四方に鱗々や花車

、

外山

湖水眺望

水満て頂き近し花の雲

熊本

箕溪

花の香に鳥も手向を啼日哉

、

尺菊

僕一人犬を愛する花見哉

、

李夕

花ちるや僧なき寺の古瓦

、

文山

陀羅尼よむ声に散けり軒の花

、

飲露

月七日花散る風もなかりけり

花のかげとゞろくいざり車哉

山城や桜にひゞく弦の音

花なれや雲も奥ある朝朗

行末を思ひ入けり山ざくら

草敷つ石に憩ひつ花ざかり

みな人の顔うゐ／＼し花の山

はつ桜雁みな帰尽しけり

山人にたづねて入るや花の道

、
残鳥

、
真弓

、
田鼠

、女
千恵

、
嵐松

、
亀令

、
深里

、
洗竹

、
孤蕭

花ちら／＼散るや小鍛冶が窓の先

甲佐

夢月

月は山端しらむは花の光かな

義一

漣やさくらがもとの石廣し

李関

世の中のさまや散花遅ざくら

素羅

花むしろおしくもたゝむ日和哉

草白

桜散る岨に留たり牛車

俱山

島の花跡に見やりぬ走り船

季由

谷ふかく住てかひあり遅桜

遠流

花の山うき世の外の思ひ有

女

掟

人をさす思ひ甚し花の蜂

女

惟

花うりをしばしとめたり黒格子

雪花

いとまなき人に見せたし山桜

孤鶴

雨の暮花にあはれを尽しけり

橋巴

下枝の冠にかゝるさくらかな

竹雨

あたゝまる曙の小雨やはつ桜

丹泉

寝ては夢起ては花の弥生哉

万が瀬

線川

しら雲の行ゑをしらず花の峰

三冬

手を洗ふ水尋けり花の山

諸鳩

花の山夢に分入る旅寝かな

取映

月落て障子さしけり夜半の花

梨雪

遅ざくら葉がちに見ゆる盛り哉

松柏

振つゞみならず花見の垂髪哉

白泉

いさら井や花の影汲む古柄杓

中山

桂雪

蜘蛛の糸花より花に光りけり

碧水

小雨晴て朝日に匂ふ桜かな

文里

遠近の花にも出ず家ざくら

蕙々

幾めぐり下戸はありくぞ花の山

大津

白川

知る人の日に／＼増るさくらら哉

琴路

きのふまで雪と見しまに桜がり

化雲

八重一重霞を花の風情かな

上野

雪枝

侘人も出よ明日なき花の色

涯州

松鳥

花雪吹して鳥驚きぬ暮の山

、

隣遊

しばらくは目も定まらず山ざくら

、

島霞

一筋に小道立けり花の山

、

梅山

静さは歌よむかたや花の山

、

山暁

木の本や仰向顔に桜ちる

花の山うしろに見れば暮にけり

灯消して猶朧なり峰の花

さくや桜山見る町の朝ぼらけ

あだなれや桜がもとの物狂ひ

行過て樵夫にとふや初桜

花あればこそ此山にうし車

一さかり花の雪ふるよしの哉

、
錦桃

、
和重

、
見鯉

、
波文

、
和水

日向
清井

対馬
孚湫

石見
志山

心地よの鳥のさけびや花の中

、

一洞

明ぼのやさよ／＼風にさくら散

、

斜長

けふもまた花にくせあり朝曇

、

戲遊

ゆふ虹や花より起て花に入

、

鳳沖

花のゆふべみな酔さめし人の顔

九日市

其律

入相をよそに聞けり三井の花

美作久世

呉竹

うく花を鯉のなぐさむ淀み哉

、

素牛

茶の露のめぐむ草あり花の山

、女

柳志

折りたがる子に物くれて花見哉

、

烏雪

笄の蝶も飛かもはなの山

、女

三蝶

来る人に花も見えけり花の山

、

麦丸

松のみか桜も花の一トがへり

但馬朝来山ノ麓

寿硯

来た道のほどの遠さよ花もどり

、

獅鳴

咲花に踏きる草や野路山路

、

鯨石

散花に髪はらひつゝ女子同士

、

麦雨

炭がまの煙はたえてはつ桜

、

琪竹

(濁ママ)

さなきだにかなしき物を塚の花
きのふけふ花にうつれる御法哉
諸人や黒きたもとに桜散

ちる花に家鴨ながるゝ天气哉
よみ人もしらずぬしあるさくら哉

散さくら春も廿日を限なる
花山や人になれたるひとつ猿

、
生野
、
涼秀
山黛
春江

丹波梶原
洞々
龜山
全瓦

若州
鬼雀
西津
漁林

ちる花や米かす女水をせく

、

雪肆

大名の花しづかなり堀の内

、

烏友

丈六の仏薄暮てさくら散

、

鶯少

雲の上へのぼるや花のよしの山

紀州僧

枕石

今日を花小雨くらゐに人さらず

(濁ママ)

城州人はた

斗流

けふものゝ雲にもほえず君が花

、

蛙方

御舎垣に裔なく日や桜ふる

、

鯉文

まぼろしや花の名所めにわたる

、

古律

押ひらく襟へさくらの散にけり

城南

五午

花いづこ岩うつ波にまどふたり

、

子鬘

花ざかり雨の香もゆるひるのつじ(濁ママ)

、

雲坡

祝部が花散やどを鎮華

、

魯長

岸の花水をあやどる風情有

(濁ママ)
だい(濁ママ)

百哺

廻り来しむかししたふや花の山

さが(ママ)

峨乙

玉の緒の夜只さくらにうかれけり

深草

柏葉

思ひ出て華遠きぞと浮れけり

、

巴橋

花高みうしろ望めば杉の風

、

礮水

朝かげや花の下枝鳥つたふ

洛

菩山

夜の花や人顔うつるすり火打

稲淵

花に行こゝろ／＼や西ひがし

虹光

花守をきけば高位の酒宴哉

渭川

常に見ぬ雲井の花も隣かな

長厚

花の枝折出ればぬくき月夜哉

望笑

散んとす花の上より雲がしら

楚椿

花遠し一筋道の都鳥

几岩

下臥や真上の花は鳥が寝る

桜咲と人申より馬に鞍

子共等も筵敷けり花の陰

花に酔てかりし鼓を枕かな

見るも／＼男ばかりや山ざくら

花に花いらかにつゞく東山

御車の雫受けり雨の花

咲つ散つわりなき花のけしき哉

琴抱てねぶれる花のあるじ哉

紫暁

玄兎

把柳

孤秀

桃李

馬蓼

潮路

志諺

都雀

都辺や花の中なる仏達

遠山の桜見付る小姓かな

夕日にも花にも青し水の色

踏入らば花に迷はん山のおく

嗟峨迄は目ぼしの花に浮れけり

宿かりて見に行暮の桜かな

日比より近まさる花の山辺哉

佛のえぼし忍にん濁ママばし夜の花

夕浪に磯山ざくら敷けり

あふひ

甫尺

俚尤

貫子

五芳

在貫

白黛

不朽

定雅

花の陰ふところ鏡くもりけり

ぬるゝ気で寝るも興あり花の雨

はつかづゝ酒買庵の花見哉

明くれにたゞ花を守無筆哉

いたづらに過してけふの花見哉

くれがたや花の座敷のとりまたじ

其中に花紅葉して散さくらかな

虹消て花の雲覆ふ野中哉

太刀はきし衆徒何事ぞ山桜

沙長

虎白

董蝶

桂舟

凌冬

槐路

素六

吟賀

砂文

花ちりて雲のみのこる夕かな

夜桜や足にかゝりしから財布

岩はなに上見ぬ鷺や桜散

酔ざめや狼送る夜の花

大寺や花にゆるさぬ門も有

亀うりも来にけり池のさくら花

むく君とよばるゝ花の主かな

狩暮て華に臥猪の山ふかし

つんぼりと花の山見るあした哉

在京

明川

郭天

青路

梵外

葛谷

寒河

月湖

泥尾

漢水

桜見る旅や去年の飛鳥山

在京

鬼口

天人もいづや桜の中の町

、

婆娑

鞭あてゝ花のあらしに追付か

、

蝸角

ぬれつゝも思ひとまらず雨の花

紫蘭

糸ざくらほどけてうき世心かな

台嵩

又平が画は桃にこそいとざくら

斑山

鐘十日花に文雅のねたみかな

在京

其叟

雛鶴も動く色あり夜の花

、

梨山

風なくて匂ひや乱る夜の花

、

素吟

しるしうつ木は横にして花の中

鏡見しあたま成らん花の塵

西東花に二日の日をつもり

猛者引ば何と教えんさくらかな

咲たとて只ひとり見る桜かな

はつ花やたゝみながらの此小袖

かざし行花おしと思ふ蒼がち

興つきて駕籠につけゝる桜哉

散る花をひく浪引やいづこ迄

不木

自来

二雷

光暁

さよ

つよ

得終

嵐月

百池

女

ゝ

尼

あかぬ日を花よりそむく移り哉

しみ／＼と花の嵐に寝ぬ夜哉

遅ざくらちるかなしさは秋の風

百の錢遣ひはたして花見かな

嵐山終に日暮て花の声

宵の間や花のしら浪水くらし

けふと思ふは花ふところに曇けり

花の香や百とせの今世にみつる

人去て月静なり花の中

車蓋

青阿

以外

土卵

月峰

一峰

古塘

其成

蘆涯

花の中に桜と見ゆる一木かな
桜さかり却て風の光そふ

桃睡

闌更

陽炎の眼にたばしるや瀧桜

江州辻むら

千鶚

(濁ママ)

二日来てまだ奥は見ず山桜

勢州亀山

兔秋

一筋に花を心のあゆみかな

行脚

斗醉

朝ざくら行暮人にて有けらし

、

貞天

人はいさ斯までおしき花の暮

、

里栄

蟻のごと這上る見ゆさくら人

石蘭

山ざくら心届かで暮て行

袖すれの桜にのこるなさけ哉

洛

あふみ

玄児

一蕘

京三條通寺町西

御俳諧書林

菊舎太兵衛

(裏表紙見返し)

(裏表紙)